
優等生と問題児

サンチャゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優等生と問題児

【Nコード】

N1631Y

【作者名】

サンチャーゴ

【あらすじ】

美女で優等生な少女「平田正美」ひらたまさみと悪戯好きの問題児「森彰介」もりしょうすけは、担任の先生から出された宿題のために渋谷に向かう。だが、何者かに誘拐され、廃墟に閉じ込められる。相性の合わない2人に、恐るべき殺人鬼たちが刻一刻と迫ってくる。はたして2人は、力を合わせ、生き残れるだろうか？

ブローグ

管理人は物音に気づいた。

若者の街、渋谷は変わった。治安が悪くなり、まるで犯罪者の街だ。

盗みと殺しが日常化された最低な街だ。

そんな街で、物音などたいしたことなど無い。

だが、今の音は明らかに異様だ。巨大な金属が引きずられる音がした。

管理人は悪態つきながら、煙草を銜えて管理室を出た。外は暗く、電灯ひとつついていない。

管理人は厨房に入った。そこは肉がぶら下がり、包丁がずらりと並んでいた。

管理人は懐中電灯で汚い厨房を照らしたが、何も無かった。

だが、外で物音がした。

（んだよ、面倒だな）

管理人は外に出た。外には少女が泣いていた。

少女は中学生くらいの身長だったが、幼すぎる容姿だった。

「嬢ちゃん、どうかしたか？」

管理人は無愛想に言った。少女は黙って泣いていた。

「飴あげようか？」

ポケットから飴玉を取り出した。

「甘いぞ」

少女はまだ泣いていた。

「どうしたんだ？お父さんとお母さんは？」

少女は顔を上げた。

「殺された……」

「本当に？犯人の顔を覚えてる？」

少女は指差した。

「後ろ……」

管理人は後ろに振り向いた。瞬時に、恐怖の感情が大きくなった。管理人は首を掴まれ、軽々と持ち上げられた。

そして、巨大な肉切り包丁で腹部を刺され、下半身を半分にされた。

『それ』は管理人を捨て、包丁を引きずりながら、少女に近づいた。少女はただ、逃げようとせず、見つめていた。

「おじさんは幽霊？」

少女は聞いた。

「それ」は包丁を振り上げ、少女の首を切り裂いた。真っ赤な血が、降り注ぐ。

渋谷…盗みと殺しが日常化された街。今日もまた、人が死んだ。

ブログ（後書き）

どうも、サンチャゴゴです。これから連載を始めます。読んでいただければ、感想をください。これからよろしく願います。

優等生の平田正美

まったく、これほど腹立たしいことはないわよ！

私は、背中までたれる髪を、首の後ろに束ねながら廊下を歩いた。いくら現場に居たとは言え、私にも責任があるなんて明らかにおかしい！赤い絵の具を混ぜた水を床に撒き散らし、偽殺人現場を作ろうとした問題児の犯行現場にたまたま居合わせ、たまたま先生と出くわし、共犯者扱いするなんて……

「共犯者じゃないなら、後で職員室に來い」

先生はそう言って去ったけど、普通は職員室になんか行きたくない。だけど、もし、このまま共犯者扱いされたら、こっちのプライドも、評判も、信用も、全部ずたずたに引き裂かれる。それだけは避けなくちゃ！

清潔な廊下を歩いていると、警察がびっしりいて、感情を表に表さない、平然とした顔で動き回っている。私は何かあったか不思議に思い、近くの警察に訪ねてみた。

「あの、何かあったんですか？」

「多目的室で死体が発見された。だから、しばらくは立ち入り禁止だ」

私は耳を疑った。この中学校で死体ですって？

「それって、この学校の生徒ですか？」

「いや違う。30代後半から40代前半の男性だ。身元は今確認中だ」

警察は低い声で言った。その一瞬だけ、不安な顔を見せた。

この神奈川県で殺人だなんて……神奈川県は他県と比べて比較的政治が安定している。一番治安が悪いのは、首都東京の渋谷だ。あそこは盗みと殺人が日常化されているという。

私は、悪夢を見た感覚で廊下を通り過ぎた。窓で外を見ると、特殊機動隊（SAT）まで来ていた。よほどな大事件なんだろう。

私は2階の職員室に着いた。扉の前には、既に、校内1の問題児、^{もり}「森 彰介^{しやうけい}」が立っていた。彼はパブリックエネミーと呼ばれるほどの問題児で、学校内では「犯罪王」や、「ジョーカー」や「デビルボーイ」やらの異名を持つほど。頭はいいらしいが、問題行為ばかりしているため、教師達からは危険視されている。容姿は、黒髪

のショートヘアーに、問題児とは思えない中性的な美男子だ。

彼は反省の色一つ見せずに、ただ突っ立っていた。

「どいて！」

私は怒鳴りながら、職員室のドアをノックした。

「2年2組の平田正美です。黒木先生をお願いします」

担任の黒木は、書類を纏めながら、こっちを見た。

「こっちに来い」

低い、渋い声で言った。

私と彰介は職員室に入り、黒木先生の所に向かった。

「話は中村先生に聞いた。お前達、問題を起こしたそうだな」

私は反論した。

「違います！私はたまたま居合わせただけで、共犯者じゃありません！」

黒木先生はそれを聞くなり、うなずいた。

「それは信じたい」

「信じてください！」

黒木先生は書類をぽんつと机に置き、こちらを見た。

「前にこんな生徒が居た。そいつは優等生で性格はよく、生徒からも教師からも信頼されていた。

が、新聞に載るような大事件を起こし、今は少年院に居る」

私は怒りを感じたが、ぐっところえた。

「私は……やっていません」

「嘘の可能性がある」

「彼女はやっていません」

私は驚いた。彰介がやっと口を開いたと思うと、私の無実を証言し

た。

「彼女は犯行中の僕を見るなり、やめるように説得していました」
私は再び驚いた。説得はしてない。彼は嘘をついた。

黒木は黙ってうなずいた。

「信じたいが、単に彼女を庇っている可能性も否定できない」

確かに、目撃者は誰も居ない。私は悪態つきたかった。

「そこで、お前らに宿題を出す」

「宿題ですか？」

私と彰介はそろって聞いた。

「君達に渋谷に行ってもらっ」

私はまた驚いた。

「一体何のためですか？」

「レポートだ。渋谷の現状をレポートして来い」

私は殴りたくなった。

「渋谷は犯罪の街ですよ？」

「単に噂だけかもしれない。文章だけじゃ信憑性が低いから、写真も撮るように」

私は納得できなかった。

「もし噂が本当なら、私の命が危ないんですよ？」

「安心しろ。護身用スタンガンを渡しとく。それに拒否すれば、退学もありえる」

退学……これは避けなくはいけないことだ。やはり、やるしか道が無いのか……

「……分かりました……」

黒木は彰介のほうを向いた。

「お前は？」

「うす」

「返事は『はい』だろ？」

「はい」

私は悪夢を見るような感覚で、職員室を出た。彰介は平然とした

顔だ。まったく、この男は退学を恐れていないのかしら？いつそ、退学になればいい。元はといえば、この男のせいでこうなったわけだ。

「あなたのせいで人生めちゃくちゃよ」

彰介は頭を下げた。

「ごペンなさい」

私は、思わず大きく息を吐き出した。

こんな男と渋谷に行くなんて。1人で行ったほうがずっとましだわ。

すると、機動特殊部隊隊員2人の会話が聞こえた。

「犯行の手口からして、間違いなく奴の仕業でしょう」

「ブツチャーめ！」

ブツチャー？聞きなれない名前だわ。

「しかし、渋谷限定だった奴の殺人が、まさかここまで広まるなんて」

「渋谷じゃ飽き足りないんだろう」

1人の隊員がやって来るのを見た。

「身元の確認が出来ました」

「何処のどいつだ？」

はなまるきてつ

「花丸木鉄。渋谷区出身で、渋谷の宿舍の経営者です」

「つまり、渋谷からここまで死体を運んだと？」

「恐らく。しかも、被害者の宿舍には、少女の首なし死体が倒れていたそうです」

「頭は？」

「行方不明です」

「少女の両親は？」

「死体で発見されました。自宅で」

「ブツチャーめ！」

もしかして、殺人鬼の名前かしら？

私は疑問を解決するため、午後の授業を終えると、大急ぎで帰宅

した。

自室のノート型パソコンの電源入れ、インターネットを開いた。

検索するものは決まっている。

『ブッチャー』

該当するサイトがいくつもあった。そこで、信憑性の高いサイトを開いた。

『ブッチャーは、渋谷で出没している殺人鬼である。被害者を刃物で切り裂き、死体の一部を持ち帰るとする。被害者の死体が、解体された豚に似ていることから、警察側から肉屋と名づけられた。犯人はいまだ不明で、被害者の数は21人を越えているとされる。』

21人も殺害しているのに、犯人の特定が出来た居ないなんて……警察は何をしているのかしら？

一軒のメールが届いた。私はインターネットを閉じ、メールを確認した。

『やあ、君。ゲームをしよう。ルールは簡単。お前は逃げ、俺はお前を殺す』

いたずらメールかしら？私是不気味に思い、メールを削除した。一休みしようと、ベッドに眠り込むと、一瞬にして、眠気がし、深い眠りに着いた。

問題児の森彰介

「ゲームオーバー」

テレビの画面に大きくゲームオーバーと出てきた。

「畜生！もう一回！」

俺はコンテニューした。

あの女……平田正美……あいつには、悪い事したな。

遊び半分で偽殺人現場を作ろうとしたら、こんなことになるなんて……

「あんた、真面目にやってるの？」

4つ年上の姉が聞いてきた。

「またゲームオーバーになってるよ」

「いつけね、本当だ」

俺はコンテニューした。

「ねえ、知ってる？」

「何が？」

「最近出回ってるチェーンメール」

「知らない。どんなの？」

「何か、差出人不明のメールが届くんだ。『ゲームをしよう』って書いてあって、ルールは誰かが逃げて、誰かが殺人を犯すんだって！」

「ふん…それで？」

「噂によると、そのメールを受け取った人は、殺人鬼に殺されるんだって！」

「怖っ！」

本当は怖くなかった。だが、本音を言うと姉の機嫌を損なうため、あえて嘘を言った。

すると、俺の携帯電話がEメールを受信した。

開いてみると、件名には『ゲーム』と書かれたいた。

俺はメールを開いた。

『やあ、君。ゲームをしよう。ルールはお前は守るべきものを守れ。』

もし、守りきれなかったら、そいつは鎖につながれ、生き地獄を見ることになる……そいつの命運はお前次第だ』

馬鹿らしい。俺はそう思いながら、メールを削除した。本当に最近の日本は腐っている。

あの女……どうしてるんだろ……きつと一日中俺のこと恨んでるんだろうな。

本当に悪いことした。まさか共犯扱いされるなんて。

「ああ！またゲームオーバー！へたくそ！」

姉は冗談っぽく言った。姉は本心で悪口を言わない女だ。本当に嫌いな奴には、堂々と喧嘩を売る。

俺はコンテニューした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1631y/>

優等生と問題児

2011年11月16日19時20分発行